海外における継承日本語教育
国際フォーラム IN BOSTON

ー日本語教育推進法の基本方針制定に向けてー

言語形成期前半（0～8歳前後）の大切さ

～バイリンガル・マルチリンガル教育の視点から～

桶谷仁美
イースタンミシガン大学

©Oketani

2020. 3. 19

1a. 大学・補習授業校A校　5カ年共同プロジェクト概要(2014~2019年度)

（助成番号75542 代表 桶谷仁美）

乳幼児・園児	小学１～２	小学３～４	小学５～６	中学	高校

話し言葉から書き言葉へ
移行していく
言語形成は
最も大切な時期

「小4の壁」
抽象概念・抽象語彙（漢熟語）が
どんどん増え、小学低学年まで
に基礎力がない子はついていけ
なくなる

日本語のレベルは さら
に高まり、同時に学習目的
が生徒間で異なってくる

大学と補習授業校A校との母語支援の取り組み

親の啓発と講師研修

積極的な母語（日本語）育成およ び
支援、保護者啓発のための特別講演
会、小一面接、バイリンガル・マルチ
リンガル家庭支援、定期的な日本語測定等　（来年
度より学校ぐるみで保護者間のコミュ
ニティネットワーク構築予定）

柔軟な教科学習の導入

教科等の枠を超えた横断的・総合的な
「総合 学習」等を通し、既存知識を活性化
し、意味 理解への知的な足場掛けをし
ながら、日本語力・思考力・表現力等を
養う、講師研修

選択教科の充実

生徒の目標にあった
選択コースの設定（実践国語、
講師研修等）

1b. 永住者・駐在者が混在する補習授業校との大学共同5カ年プロジェクト(PK-G12対象)
　乳幼児・園児保護者対象特別講演会「海外で母語*を育てる（バイリンガル・マルチリンガル育ての基礎知識の紹介）」（桶谷、2016:4）より　(*「母語」は一つではない)

「参加者の声」（永住者も駐在者も同じような悩みを共有している）

- 年齢的にこれから言語習得の時期となるため、多言語習得を見据えて保護者として出来ることや気を付けることがあれば知りたいです。
- バイリンガルに育てたいが、日本語(母国語)はきっちり入れたい。また、日本に帰国後、どのような教育をすればバイリンガルになりますか。
- 子供の父が英語しか話せないこと、また毎日デイケアで英語で生活していることで、子供が話す言葉がほとんど英語の状態です。私が話しかける日本語は理解しています。将来、話す聞くだけでなく、きちんと読み書きのできるバイリンガルに育てることができるのか心配です。
- 特に3歳の子どものことばについて、どのように育てていけばよいのかアドバイスいただけたらと思います。日本語も十分ではないため英語が日本語と結びつかず、こちらにきてから混乱していることが多くなったように感じます。
- 2人とも日常会話は英語も日本語も全く困ることなく上手に使い分けているのですが、母語の確立という観点からこのままでいいのか迷う時があります。年齢が上がるにつれ、難しい内容を考える必要が出てきますし、その際に順序立てて考える能力を身につけておくにはどうしたら良いでしょうか？
- 上の子が英語がわからなくて学校が怖いと言い、なかなか現地校に馴染めません。自分も英語をどう教えたらいいかわかりません。何かいい方法はありますか。

2. 先行研究

a. 母語の大切さ
b. 年齢と軸となる言葉の習得
c. 3つのレベルの言語能力とCUPモデル
d. ことばの伸長のための必要要因

a. 母語の大切さ

❑子どもの母語の発達レベルは、第２言語発達のよい指針となる。

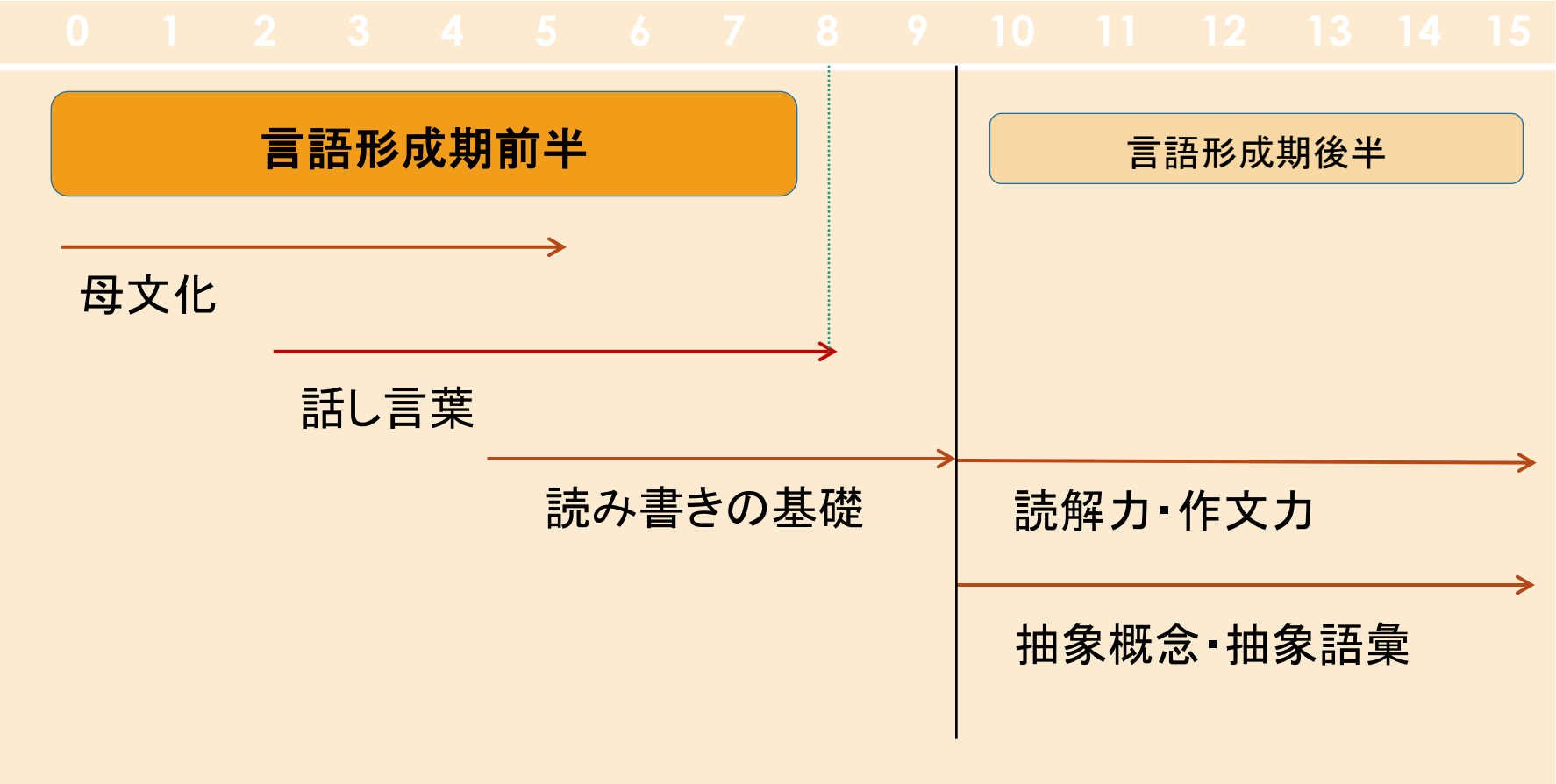
母語がしっかりしている子どもが現地校に入学した場合、学校で学習することばでの読み書き能力もしっかり発達する。子どものおかれている教育的環境が２言語接触を促進すればするほど、両言語はそれぞれ互いに育み合う。

❑子どもの母語は消えやすく、ややもすれば、学校教育の初歩期に簡単に喪失してしまう。

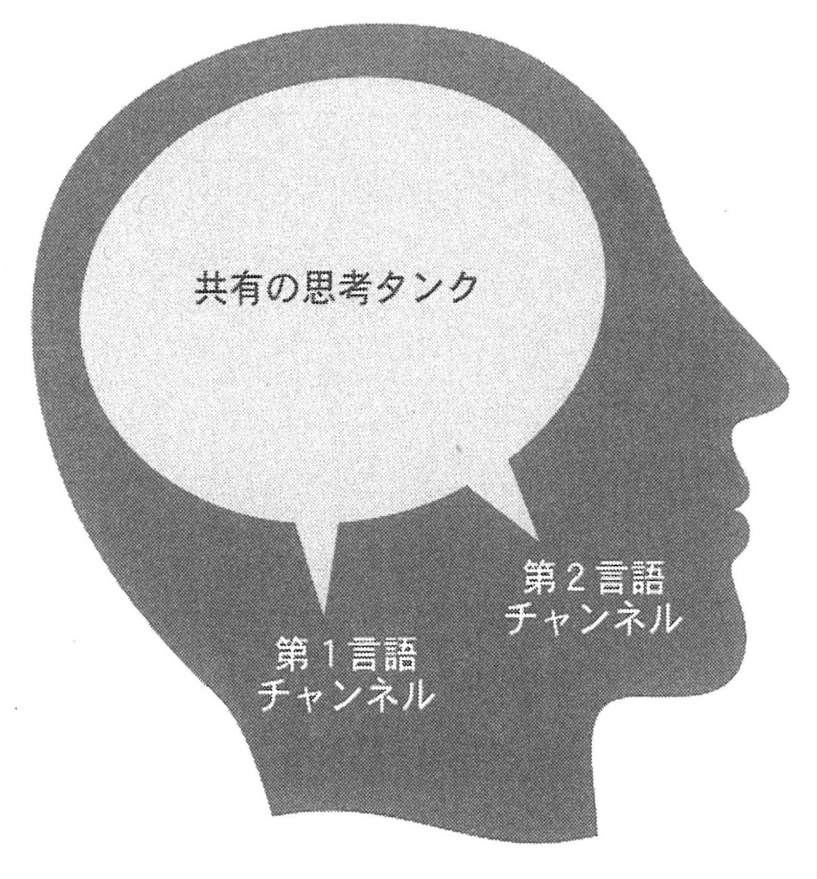
母語を使うコミュニティがない場合、学校教育を始めて２、３年の間に、母語でコミュニケーションを行う能力を失うことになる。子どもたちは、母語での受け身的な能力（聞くこと）は保持しても、友だちや兄弟と話す時や親への返事などはすべて現地語で行うようになる。

（カミンズ「序文」、桶谷 2007：III-V）

b. 年齢と軸となることばの習得　（中島、2010:23）



c. カミンズの3つのレベルの言語能力とCUPモデル



カミンズの３つのレベルの「言語能力」

- Conversational Fluency = 基礎会話力
- Discrete Language Skills = 弁別的言語能力
- Academic Language Proficiency = 教科学習言語能力

（Cummins, 1996；2001）

カミンズのCUPモデル（左図）

「この（共有の思考）タンクと呼ばれるものは、いわゆる学力、思考力、認知力とされるものなのですが、もし、例えば、英語も日本語もどちらにも接触する機会が子供の周りにあって、学習するのに十分な動機付けがあれば、一方のことばで、その思考タンクを刺激して、発達させてやると、もう一つのことばの力も伸びるという説です。」（例）光合成（Photosynthesis）　（桶谷、2007:112)

d. ことばの伸長のための必要要因

- 入国年齢
- 学校歴
- 滞米年数
- 母語での学校
- 教師力
  (中島、2010)

- 家庭、学校、コミュニティなどの言語環境要因
  - ❖使用言語の量と質
    - 母語を話す隣人や同級生、親戚の有無、日本人コミュニティの接触度、
    - 家庭での母語使用、兄弟間の言語使用
    - 母語メディアへのアクセス
    - 母国への一時帰国の度合い
    - 親のディスコース・ストラテジー
    - 親の帰国展望、親子のアイデンティティ、親子の将来への明確な目的意識
  - ❖学校と家庭との連携・協力、地域社会からの支援など

(桶谷、2010)

3a.「日本語教育の推進に関する基本方針」（素案）「イ　海外に在留する邦人の子等に対する日本語教育」

海外在留邦人の子女に対する日本語教育は，将来，日本へ帰国した際の就学や就職等に当たっての備えとしても重要である。また，海外に移住した邦人の子孫等は，我が国と在留国との間の交流や在留国における親日層の拡大において活躍が期待できることから，これらの者が日本をルーツに持つことを認識し，我が国に関する理解を深めることを促すため，これらの者に対する日本語教育支援に必要な施策を講じる。

【具体的施策例】

- JFを通じ，海外に移住した邦人の子孫，外国人と日本人を両親に持つ子女に対する日本語教育環境の実態の把握に努め，必要な支援を実施する。
- 海外在留邦人学齢児童生徒に対して，国内の義務教育教科書無償給与制度の趣旨に沿って，教科書の無償給与を行うとともに，在外教育施設における教 育環境機能の強化を図るため，教師の派遣，校舎借料・現地採用教師給与・ 安全対策費への援助，教材整備等の支援を行う。

3b.「日本語教育の推進に関する基本方針」（骨子素案）

「（8）海外に在留する邦人の子等に対する日本語教育（第19条関係）」

- 海外に移住した邦人の子孫，外国人と日本人の両親を持つ子女等は，我が国と在留国との間の交流や在留国における親日層の拡大に活躍が期待されることから，日本をルーツに持つことを認識してもらうとの観点からも，これらの者に対する日本語教育支援の充実を図るため，国際交流基金等と連携し，これらの者に対する日本語育環境の実態の把握に努め，必要な支援を実施する。
- 海外在留邦人学齢児童生徒に対して，できるだけ国内の義務教育に近い教育環境を確保する。特に，在外教育施設に通う児童生徒の日本語教育の充実を図るため，教師の派遣等在外教育施設への支援を行う。

4. 要望

要点：

- 乳幼児・幼稚園児への支援の強化
- 多様化する補習授業校
- バイリンガル・マルチリンガル教育の視点の大切さ（中島、2020）

1. 言語形成期前半（自然習得が中心）の幼児期の母語・現地語支援（バイリンガル・マルチリンガル育て）が、その後の言語形成に最も大切な時期であることをまず認識し、「素案」に新たに「乳幼児・幼稚園児」に特化した項目を盛り込む必要がある。（日本在住の外国人等の子女にもこの考え方は相当する）。
2. 海外在留邦人や移住した邦人が混在する補習授業校等においては「乳幼児・幼稚園児」への日本語（母語）教育支援の考え方は同じ。バイリンガル・マルチリンガル伸長の上で、この二つのグループを分けずに支援するべき。

要望（続き）

要点：

- 乳幼児・幼稚園児および親への支援の強化
- 多様化する補習授業校
- バイリンガル・マルチリンガル教育の視点の大切さ（中島、2020）

3. 海外で言語形成期前半に軸となる母語（または現地語）が育たないと、その後の言語発達に大きな支障が出ることが予想される（ダブルリミテッド）。カミンズのいう「共通の思考タンク」である教科学習言語能力（幼児期の場合はプレリタラシー）の充実を中心に支援を行う必要がある。
4. そのためにも、海外で子どもを育てる親の啓発、日本語教育支援機関の講師研修、コミュニティの充実（ネットワークづくり）等が各地域で欠かせない。
5. 日本国内外のグローバル人材育成につながる、「海外のバイリンガル・マルチリンガル教育の視点」を基本方針に導入するべく、その専門家を日本語教育推進関係者会議に招聘いただき、海外の知見を吸い上げていただきたい。

参考文献

石井恵理子（2007）「JSL児童生徒の言語教育に関する親の意識ーポルトガル語及び中国語母語家庭の言語選択ー」『異文化間教育』pp.27-39 異文化間教育学会

内田伸子（2003）『言語発達心理学＝読む書く話すの発達＝』放送大学教育振興会

桶谷仁美（2020）「バイリンガル・マルチリンガル育成の視点からの母語・継承語としての日本語の育成」AATJ 2020 Spring Annual Conference HLSIGパネル 3月19日（オンライン掲載予定）

桶谷仁美（2016）「海外でことばを育てる」 デトロイトりんご会補習授業校主催国際人財育成プロジェクトEMU共同研究特別講演会. 9月17日

桶谷仁美（2014）「補習校における母語（日本語）育成の可能性を追って—バイリンガル教育理論の視点から」シカゴ・デトロイト管内連絡協議会分科会「継承語児教育の現状と対策」

桶谷仁美（2010）「9章バイリンガル育成を支える心理的・社会的・文化的要因」中島和子（編著）『マルチリンガル教育への招待　言語資源としての外国人・日本人年少者』 ひつじ書房. pp. 277-301

桶谷仁美（編著）(2007)『家庭でバイリンガルを育てる　０歳からのバイリンガル教育ー継承日本語教育の立場からー』明石書店

カミンズ・ジム(2007) 『序文』桶谷仁美編著 『家庭でバイリンガルを育てる　０歳からのバイリンガル教育ー継承日本語教育の立場からー』明石書店

中島和子（2020）「年少者継承日本語教育と日本語教育推進法」「海外における継承日本語教育　国際フォーラム IN BOSTONー日本語教育推進法の基本方針制定に向けてー」3月18日

中島和子（編著）（2010）『マルチリンガル教育への招待　言語資源としての外国人・日本人年少者』ひつじ書房

中島和子（1998）『言葉と教育』 海外子女教育振興財団

中島和子・高垣俊之訳（カミンズ・ジム、ダネシ・マルセル著）（2005）『カナダの継承語教育　多文化・多言語主義をめざして』 明石書店

秦野悦子（2005）『ことばの発達入門』 大修館書店

Cummins, J. (1996、2001) Negotiating Identities: Education for Empowerment in a Diverse Society. CABE.